

文化的ジェノサイド

民族文化の抹殺と抵抗運動

総合地図 環境危機
石井実内著、2010 日本地図社
環境学者山 弘文堂

ジェノサイドとエスノサイド

世界各地の生活文化の多様性を失うことは、人間とのバランスの上に成り立ってきた生物多様性の喪失を意味する。

ユダヤ系ポーランド人のR.レムキンは、ナチスがユダヤ人らアーリア人種以外の「劣等人種」の抹殺を目指していることを指摘し、それをジェノサイド（大虐殺）またはエスノサイド（民族抹殺）と呼んだ。それと同時に、ドイツ人と同じアーリア人種ではあっても、ドイツ以外の文化や言語の段階的な消滅をはかる政策をナチスがとっていたことも指摘している。

「文化的ジェノサイド」とは、必ずしも直接の身体的な破壊を伴わず、固有の民族文化をまるごと消し去ってしまうことを指す。また、エスノサイドを、レムキンの意味としてではなく、ユネスコのように文化的ジェノサイドの意味で使う例もある。

アイヌ民族の苦難

わが国の例では、アイヌ民族がたどった苦難の道が、まさに文化的ジェノサイドといえるだろう。アイヌ語でシエペ、すなわち「本当の食べ物」と呼んだサケを捕ることを禁じて密猟として取り締まったり、祭りを行なう聖地をダム建設で水没させたりすることは、こうした例にあたる。もっとはっきりしている例は、固有の言葉を奪い、禁じることである。その方法は、植民地政府による強圧的なものだけではない。「アイヌ」とは「人間」を意味し、「アイヌネノアンアイヌ」、すなわち「人間らしい人間」の誇りをこめた呼称である。アイヌというだけで差別の目でみられる歴史の中で、アイヌ民族最大の団体は、呼称としてのアイヌ協会を、同胞を意味する「ウタリ」を用いたウタリ協会に改め、1961～2009年の間、用いてきたのである。

沖縄の方言札

こうした文化的ジェノサイドは、往々にして教育の現場で推進される。ここで沖縄における方言札の問題を取り上げてみよう。19世紀末まで沖縄で使用された国語教科書は、方言と日本語のバイリンガルのものであり、現場での指導においても方言は使用されていた。ところが、20世紀に入って、普通語と称する日本語の

みでの授業が行われるようになったのに伴い、方言を使った児童生徒に罰として方言札（写真1）を渡すという制度が小中学校に導入された。方言札を首にかけた児童生徒は、次の方言使用者を発見して自分の方言札を渡さなければならなかった

このため、同級生の足を踏むなどして「アガー（痛い）！」といわせるということも横行した。詩人の高良勉は、1960年前後の沖縄島南部の小学校での回想として、放課後まで方言札を持っていることが度重なると、放課後残されて竹ぼうきの柄がばらばらになるまで先生にお尻をたたかれることもあったと述べ、さらにその方言札が学校外の集落や地域にまで出回るようになったため、家に帰っても自由に話すことができず、「みなだんだん無くなっていました」と書いている。文化的ジェノサイドの1類型としての言語的ジェノサイドが、学校を通して推し進められたことを示す事例である

沖縄初の国指定有形民俗文化財である竹富島の喜宝院蒐集館には方言札の実物が残されている。木製の札の表には方言札と墨書きされ、裏には竹富小学校と記されている。よく方言を使つたために、しばしばこの札を家に持ち帰ることになった、現在の喜宝院住職の上勢頭同子は、札を家に持ち帰れば叱られるため、学校からの帰路にある拌所の木に方言札を預けて帰宅したという。

植民地朝鮮における創氏と改名

民族の文化の根幹をなすものは、固有の言語であるが、それにも増して大切であると考えられているのが民族としての帰属意識（アイデンティティ）である。そして、民族を構成する家族や個人にとってのアイデンティティとしては、自分の属する家系あるいは家族の名前と個人の名前があげられるだろう。植民地において、子どもに宗主国の言語による命名をする例は多



写真1 竹富島の方言札（2009年、喜宝院蒐集館蔵）

い。1940年朝鮮総督府が行った創氏は、結婚しても姓が変わらない夫婦別姓から、一家に1つの氏だけを認める日本式のシステムへの移行の強制という意味で、伝統的な文化を根幹から改変することを目指すところに本質がある政策であった。同時に日本風の氏・名への変更に向けて強力な誘導が行われた。現在でも、在日韓国人・朝鮮人の社会では、民族名を名乗るか日本名を名乗るかは、同化への圧力の強い日本社会の中での悩ましい問題となっている。

地名の改変

伝統的な地名が外來の地名に置き換えられることもまた、文化的・言語的なジェノサイドの1つの形である。たとえば温泉で有名な登別は、アイヌ語では *nupur-pet* すなわち「濁った川」という地名であったが、これにあてた漢字から「のぼりべつ」となったものだし、札幌市豊平区の地名月寒も、元来は *chikisap* というアイヌ語だった。地名に漢字をあて、それをさらに日本語読みしたり、外來語をもちこんだりして、もともとの地名の持っていた豊かな意味を失ってしまうといった事例は、平成の大合併で誕生した南アルプス市のように、現在も日本の各地で進行中である。西表島西部の壠地トウドウマリの浜は、復帰後リゾート関係者などによって「月が浜」などと呼ばれてきた。この名称が道路標識にまで登場したことから、約30年にわたる地元からの働きかけによって現在は正しい標識となっている。

文化的ルネサンスと残された課題

2009年2月、日本最南端の高校、石垣島の八重山商工高校の郷土芸能部による伝統芸能の発表会が、いつもは石垣島や竹富島で行われていたが、初めて西表島で催された。八重山の島々で伝承される民俗芸能の上演であり、全国の高校で2位となり文化庁長官賞を受賞するほどの高いレベルの、若々しい演舞と歌三線は、会場を埋めた島びとたちに大きな感動を与えた。韓国では1970年代には農村のいたるところにあった民俗芸能が、いまでは例外的に珍島という島で高齢者が演じられるだけになってしまっているのと比べると、この八重山の状況は、驚くべき違いである。各島々で開催されている、子どもたちによる「島ことば大会」などとあいまって、いままさに八重山の方言による民俗芸能が文化的ルネサンスのただ中にあり、学校教育がその原動力の1つとなりうることを示す経験だったといえよう。



写真2 八重山の若者の踊り（西表島、2009年）

しかし、そこにもなお問題は残っている。実は奄美・沖縄の島々の方言の多様性はきわめて大きく、とくに八重山では音素の数だけに注目しても、与那国島の3母音から波照間島の7母音まで実に多彩なのである。それにもかかわらず、長く政治の中心が石垣島に置かれてきたことから、石垣島での発音が標準とされ、古典芸能のコンテストにおいても、石垣方言がきちんと発音できるかどうかが評価の重要な基準になっている。高校が石垣島にしかないなかで、ふるさとの島の歌の石垣方言での歌い方を高校で習って公演する時、高齢者の世代は孫の晴れ姿に涙を流しつつも、言いようのない違和感を覚えることがあるのである。

西表島の地域おこしリーダーの石垣金星は、芸能の世界での石垣島の支配が、サンシンの楽譜にあたる工工四をもつことを1つの背景としていることに気づいて、約30年の歳月をかけて西表島の民謡の工工四を完成させた。これもまた、文化的ジェノサイドの中で消滅に瀕した1つの文化のサバイバルの試みであるといえよう。

人間を対象とするフィールド科学にかかわる者は、ユダヤ人を識別するためにナチスに協力してジェノサイドに荷担した自然人類学の歴史や、関東軍からもらったアヘンを聞き取り調査への協力の謝礼とし使いながら調査を進めたわが国の民族学・文化人類学への反省をふまえて、いかにすればジェノサイドの側でなく、文化的なサバイバルやルネサンスの側に立つことができるかが問われている。

【安溪遊地】

⇒ **D**文化的アイデンティティ p154 **D**言語の絶滅とは何か p186 **D**環境問題と文化 p190
〈文献〉全京秀 2005. 石垣金星 2006. 萱野茂 1990. 萱野茂・田中宏 1999. 近藤健一郎 2008. Lemkin, R. 1944. シュルマン 1981. 高良勉 2005.